

## 坂口安吾のエッセイ・評論

喜多川恒男

一九六二年（昭和三十七年）十一月、中央公論社は、中公新書の第一冊として、桑原武夫編『日本の名著―近代の思想』を出版した。

この書物は、そのまえがきに記されているように、明治維新から、敗戦の年、一九四五年（昭和二十年）までに書かれた（出版は、一部、戦後のものを含む）哲学・政治・経済・社会、歴史、文学論、科学にかぎり、「近代思想」という副題をつけた上、もっぱら独創的で、日本人の手になるものに限られ、五〇の作品を選んで、その解説を施したものであった。その中の一著として、坂口安吾が戦争たけなわの一九四二年（昭和十七年）に、「現代文学」という小雑誌に載せた『日本文化私観』は選ばれたのであった。ここに、坂口安吾は、近代日本におけるすぐれた思想家と認められるに至ったのである。

二十歳代の安吾は、一九三一年五月、「青い馬」の創刊号に、『ピエロ伝道者』、ついで、翌年三月、同じ第五号に、『F A R C Eに就て』を載せ、ナンセンス文学、笑いの文学を提唱している。一九三三年四月、雑誌「桜」に載せた『新しき性格感情』では、N・R・Fの新年号に、イリヤ・エレンブルグが、「青年期ロシア」という報告書を寄せていることに言及して、その末尾に、私は、我々の生活に解き難い神秘と超越を与える奇怪な魔物が、全てその不思議な源を遠く「死」に発しているように見え

てならない。やがて死なねばならないこと——生き生きとした生活の中では一見さらに問題でないこの事が、実は無限の錯雑と、思いがけない表情を、最も進化した文化の諸相へさえ滲みだし、根を張りめぐらしているように思えてならぬ。完璧の制度も、死を、順って、人間を解きたいように思われてならぬのだ。

今、私にとって、死は我々の生活に最大のからくりを生む曲者に見えている。

と記している。

一九二七年（昭和二年）の芥川龍之介の自殺に衝撃を受けて以来、「死」の意識は、強く安吾を捉えていたが、友人、長島萃の死に触れて『長島の死に就て』においては、

常に自分自身に舌を出しているところの、も一人の自分を感じつづけているところの宿命的な孤独人であった。世に最も悲しく、最も情けないところの宿命的な孤独人であったのである。彼の死が不幸であるか幸福であるかは、今私にはとても断定はできない。

と書いている。

さらに、安吾に「死」を一層身近な問題として意識させたものは、彼を、見出し、彼の作品のよき理解者であり、文学上の師であった牧野信一の死であった。一九三六年（昭和十一年）、三月二十四日、牧野信一は縊死したのである。同年、五月「作品」誌上の『牧野さんの死』の冒頭には、

牧野さんの自殺の真相は彼の生涯の文章が最もよく語っている。牧野さんの文学は自殺を約束したところの、自殺と一身同体の文学だった。

とある。

このような、人間にとって逃れることの出来ない「死」に対して、安吾は、真正面から立ち向かった。「死」の恐怖を、「死」を考えるより、「生きる」ことによつて、くぐり抜けようとした。

死ぬことは簡単だが、生きることは難事業である。

また、

僕には余裕がないのである。生きることが、ただ、全部なのだ

と『青春論』(一九四二)には述べている。また、『夢堂小論』(一九四五)では、

人間は先ず生活すべきものであり、生活は常に高い理想に向つて進むべきものであつて、固定してはならないものだ。と書いている。

この、「生きること」・「生活」への意欲は、安吾の文学観に、自分の生活のすべてを賭けるといふよりも、文学と生活は一つであるとの考えを生む。

いったい日本の文学者達は、文学のことだけ語り、文学以外のことなど語らぬのが純粹だと思つてゐるらしいが、これは逆だと思ふ。真に生きてゐるなら、生活の全部が文学にならねばならぬ筈、いわゆる文学だけしか扱えぬのは生活の全部が文学でない証拠で、アマチュアにすぎぬと考えてゐる。

と『大井広介という男』(一九四二年(昭和十七年))に記している。「文学」にすべてを傾けた安吾の「生きること」は、次のようなものであつた。

暗黒の孤独には、どうしても救いが無い。

また、

この孤独は、いつも曠野を迷うだけで、救いの家を予期すらもできない。

さらには、

最後に、むごたらしいこと、救がないということ、それだけが、唯一の救いなのであります。モラルがないということ自体がモラルであると同じように、救がないということ自体が救いでありませぬ。

と述べ、

私は文学のふるさと、或いは人間のふるさとを、ここに見ます。文学はここから始まる。

とつづけた上、

このふるさとの意識・自覚のないところに文学があるうとは思われぬ。文学のモラルも、その社会性も、このふるさとの上に生育したものでなければ、私は決して信用しない。そして、文学の批評も。私はそのように信じています。

と『文学のふるさと』(一九四一年(昭和十六年))では結んでゐる。

それでは、人間が、「生きること」・「生活すること」を坂口が考えるとき、その在り方は、どのようなものであつたのであろうか。『日本文化私観』を中心に、その問題について触れたいと思ふ。

安吾は、「生活する人間」と「仏教」のかかわりを次のように述べてゐる。

世俗生活をそのまま肯定する真宗の寺域が忽ち俗臭粉々とするのも当然である。

然しながら、真宗の寺(京都の両本願寺は、古来孤独な思想

を暗示してきた寺院建築の様式をそのままかりて、世俗生活を肯定する自家の思想に応用しようとしているか、落着がなく、俗悪である。(『日本文化私観』(一九四二年(昭和十七年))

また、

坊主があつて、寺があるのだ。寺がなくとも、良寛は存在する。若し、我々に仏教が必要ならば、それは坊主が必要なので、寺が必要なのではない(『日本文化私観』)

に見られるように、宗教としては、「真宗」に共感しながらも、その「寺院建築」の在り方には疑問を投げかけているところに、禅宗的なものの方、考え方を否定した安吾の思想と結びつく点が見られるのである。

坂口安吾にとっては、禅宗的なものに代表される意味での中世的な思想や美的理念は、真の孤独に徹して文学せんとする彼にとって、絶望の淵に立つて精一杯生きるものにとつて、無縁のものであったのである。

枯淡というとも如何にも救われた魂を見るようであるが、実は逆に最も功利的な毒々しい計算がつけられている。小成に安んじ悩みのない生き方をしようと志す人々にとつて、枯淡の風格

がもつ誤魔化しは救いのように見えるかも知れぬが、真に悩むところの魂にとつて、枯淡なる風格ほど救われざる毒々しさはないのである。(『枯淡の風格を排す』(一九三五(昭和一〇年))

また、

東洋的な諦めと悟り、これほどちかごろ癪にさわるものはない。(『無題』(一九三四年(昭和九年))

と、中世的な「わび」・「さび」の境地や諦念的な悟りの境地を否定し、それらの思想は、「生活する」ものにとつての毒であると考えている。

こういった坂口安吾の考えは、例えば、松尾芭蕉について、

芭蕉は庭をでて、大自然のなかに自家の庭を見、又、つくつた。彼の人生が旅を愛したばかりでなく、彼の俳句自体が、庭的なものを出て、大自然に庭をつくつた(『日本文化私観』)

と評価しながらも、芭蕉の文学の持つ「風流」性には、中世的なものを見て、これを退けている。こういう安吾の考え方は、現代文学において、志賀直哉を、「志賀直哉という位置の安定だけが、彼の問題であり」、「志賀直哉には、文学の問題などはない」という痛烈な、志賀批判に結びついているのである。